

平成25年度 秋田県総合政策審議会第1回観光・交通部会 議事録要旨

1 日 時 平成25年7月5日(金) 午後3時～午後5時

2 場 所 第二庁舎31会議室(3F)

3 出席者

○観光・交通部会委員

特定非営利活動法人トップスポーツコンソーシアム秋田 理事長 佐藤 裕之

株式会社菓子舗榮太楼 代表取締役社長 小国 輝也

日の出運輸企業株式会社 代表取締役 嶋田 康子

秋田大学工学資源学部 准教授 浜岡 秀勝

矢立峠の秘湯の宿「日景温泉」 日景 けい子

株式会社アジア・メディアプロモーション 代表取締役 渡邊 竜一

○県

観光文化スポーツ部 部長 前田 和久

〃 次長 照井 義宣

〃 次長 保坂 龍弥

〃 参事 須藤 明彦

他 部各課室長 等

4 部会長及び部会長代理の選出

委員互選により、佐藤委員が部会長、小国委員が部会長代理にそれぞれ選出された。

5 部会長あいさつ

● 佐藤部会長

観光・スポーツ分野においては観光一筋ではなくハイブリッドでなければ、新たな付加価値創造が困難な時代になっていると感じる。そういった背景が委員の人選に反映されているところだと思われる。

私も様々な審議会に関わらせていただいているが、総花的な提言をまとめるだけで終わるという場合が多い。それでは後に続いていかないため、事業化、予算化に向けてポイントを絞った議論をしていきたいと思うので、よろしく願います。また、役所側で総花的になってしまう場合もあるので、その辺も県側にご配慮いただきたい。

民間の立場、行政の立場があるとは思われるが、翻って考えれば我々は皆県民という立場で一緒なので、なるべく立場に縛られずに活発な議論を展開したいと考えている。

そして、本専門部会の位置づけは非常に横断的なものである。他部会との連携も密にし、縦割りではなく横割りの議論をしていかなければならないと思うので、その点も委員の皆様には十分ご承知おきいただきたい。

6 議事

● 佐藤部会長

それでは、早速議事に入りたい。まずは、本部会の進め方について須藤参事より説明をお願いする。

□ 須藤観光文化スポーツ部参事

本専門部会の進め方について、簡単に説明する。

まず、本専門部会の目的についての確認である。新プランで重視すべき視点として、「付加価値・生産性の向上と域外への売り込みの強化」「交流人口の拡大と県内流動の促進」「人・地域の安全・安心の確保」の3点があり、この視点のもと、6つの重点戦略がある。本専門部会においては、戦略3の「観光・交通戦略」が該当するが、この戦略では、一般的な観光もあれば、文化、スポーツや食、農との連携などを含み、また、そういった交流を支える基盤として交通分野も包含する。

次にスケジュールについてだが、本日が一回目の総合政策審議会及び専門部会であり、専門部会は今回も含めまして全4回開催する予定である。第2回専門部会については7月下旬若しくは8月初旬、第3回は8月中旬、第4回は10月上旬といった形でそれぞれ予定している。

● 佐藤部会長

今の説明に対して、委員からご質問等あるか。

特に無いようなので、引き続き、戦略プロジェクトの方向性について須藤参事より説明をお願いする。

□ 須藤観光文化スポーツ部参事

引き続き、戦略プロジェクトの方向性について、配布している検討用レジュメに沿って説明する。

まず、戦略の方向性についてだが、「付加価値・生産性の向上による域外への売り込みの促進」という観点と「交流人口の拡大と県内流動の促進による県内での消費の拡大」という観点、この両面があるという整理をしている。

次に戦略をめぐる現状と課題についてだが、統計や事業者の方々へのヒヤリング等をした中では、震災の影響は底を打ちつつあるという実感もある一方で、まだまだ今後伸ばしていかなければならない部分が相当あるのではないかと考えている。また、食品産業及び文化振興、スポーツ振興などといった観光と連携をとりうる分野についても、様々な現状、課題があるので、それぞれを振興していくとともに、どうやって交流人口の拡大につなげていくかという点について資料中にまとめている。そして、それらを支えるものとしての高速交通網の整備促進と利便性の向上、地域の実情に即した生活交通の構

築なども含めて観光・交通部会の課題として整理している。

戦略の展開としては、昨年度、観光文化スポーツ部で作成した観光の重点推進方針をベースとしながら、資料のとおり整理した。

● 佐藤部会長

それでは、検討用レジュメにしたがって委員の皆様から意見等をいただきたいと思うが、まずは現状の把握のため、各分野において確認したいことや困っていることについてご議論いただき、その上で、戦略の展開について話合っていきたい。

◎ 小国委員

数字から見ると、秋田の観光は、destinationキャンペーンや国民文化祭など力が入っているわりには、県外からの誘客にはなかなか結びついていないというのが実態であると思われる。様々問題があるとは思いますが、やはり一過性のイベント等だけでなく、日頃から繰り返し来ていただけるお客様を秋田に呼び込んでいかなければならない。そのためには、魅力ある観光地づくりや受入態勢の整備などももちろん必要だが、ストーリーを作って人を呼び込むという根本部分が重要であり、景気に左右されない集客力をつける必要がある。観光客数を増やすことも大事だが、宿泊する人が増えていかなければ、観光消費額はあがらない。交通インフラが整備されるにしたがって、通過型観光になってしまっているという現状を踏まえ、秋田を通過するお客様をいかに宿泊させるかが重要である。

また、交通インフラが整備されたとはいえ、東北の中で一番遠い（時間がかかる）のが秋田県であり、行ったことが無い都道府県ベスト5にも入っている。しかしながら、発想を逆転させれば、魅力は感じるが秋田に来る機会が無かったということであり、秋田に来るきっかけを与えることが必要だと思われる。

◎ 日景委員

日景温泉に来るお客様は、青森から南下してくるお客様がほとんどである。秋田からのアクセスが悪く、案内する場合も秋田からのアクセスをお薦めできないという現状である。

また、震災の影響に関して言えば、震災前の水準には戻っておらず、現在でも売上は震災前に比べ7割程度。その理由について、震災前から始まっていたことではあるが、観光を楽しむ人自体が減ってきているという状況が一つある。また、今の若い世代は狭いネットワークを好む傾向にあり、家族でどこかに出かけるよりも、友人家族と一緒にバーベキューをするといったことが多いと聞く。そうした状況の中でどうやって旅行に来てもらうのかとなったときに、一つ考えていることがある。それは、宿に泊まってもらった際に秋田の住みやすさをどうアピールできるかという点である。秋田の食べ物や

暮らしぶりなどを県外の方に紹介するには、宿が一番プレゼンテーションしやすいと思われる。そうしたことができる宿になろうと現在計画中である。

話は変わるが、現在想定されている戦略が6つあり、そのほとんど全てに対しても観光は何かしらの関係があるので、他のプロジェクトに対する観光の関わり方について提言したいと考えている。また、教育分野も例外ではなく、今後の秋田を担っていく子供たちが地域に誇りを持てるよう、歴史・文化を学習する機会を増やすべきである。

● 佐藤部会長

今の話から観光客の形態が変わってきているということが伺えたが、反対に、従来の観光の形態の中で、もうこれは無いだろうと思われるものはあるか。

◎ 日景委員

まず団体型旅行である。その中でも、バスで長距離移動するようなものについてはかなり厳しくなっていると思う。

また、ニーズが多様化しているため、自分で行きたいところを選べるような、自由度の高い旅行形態でなければ集客できなくなってきている。加えて、スポーツイベント等は一概に言えないが、観光客個人がインターネットで容易に情報を取得できるため、旅行会社が不要になってきている状況もある。

◎ 渡邊委員

これまで様々な観光地を見る機会があったが、待っていればお金持ちのお客様が来てお金を落としていってくれると思っている方が意外と多い。しかし、実際にそういったことがあるわけもなく、地元が受け皿を整備しなければ、観光地全体として形骸化していき、安い単価でなければ集客できなくなってしまう。また、秋田の何に満足するのかということについて、地元の方は良く理解されていないのではないかと感じる。

目標値の設定については、観光入込客数よりも消費額にし、いかに経済効果があったかを重視すべきである。観光の総消費単価をあげる施策を展開することで、本プランにおける付加価値の向上につながると思われる。また、数をたくさん呼ぼうとするよりは、新しく伸びてきそうなマーケットに対し、少人数でも良いから満足して帰ってもらえるような質の高い観光を目指す取組をした方が良いと感じる。総消費単価を上げるためには、お土産も重要なので、商品開発等を通して、他部会との連携も生じてくる。

● 佐藤部会長

県では、秋田に来た人が何に満足したかといった定性的なアンケート等は取っているか。

□ 前田観光文化スポーツ部長

継続的には実施していないが、あるタイミングでそうした調査等を行っている。

また、総消費単価というお話があったが、それに絡む概念としての総滞在時間という概念とを組み合わせた取組は昨年あたりから実施しようとしている。例えば角館については昨年の秋頃からそうした取組をしているが、その際に問題なのが、人が溜まる場が無いということ。土産店舗以外のところでも少しずつとどまってもらえるような工夫を検討しているところである。角館は本県における観光のリーディングエリアだが、そのレベルまで進んでいないところについては、地元として共有認識が取れていない、また、事業ではなく家業として動いているなどの問題がある。

◎ 嶋田委員

現行プランの策定の際にも関わらせてもらったが、これから秋田が生きる道は観光しか無いと思っている。その中でも、私は一点豪華主義で、どこかにお金をかけて伸ばしていくしか無いと考えており、それがまさに観光であると思う。秋田県は少子高齢化や、若年雇用の確保など多くの問題を抱えているが、そうした問題を解決できるのが観光である。例えば、英語力のある若い人に秋田で働いてもらい、海外からの観光客に対応してもらおうなどしてはどうか。

そして、観光で重要なのは、食べ物である。その土地でしかないもの、独自性があるものを地域が協働して提供してほしい。また、二次交通の問題も非常に大きいので、観光地間をつなぐ交通の確保が必須である。

◎ 浜岡委員

北九州の出身で、秋田に来て十数年になるが、秋田の印象としては、四季がはっきりとしていること、伝統あるお祭りが数多く残っているということである。

そのお祭りについて、実際にお祭りをやっている方々は見に来る人のためにやっているわけではないと思うが、その姿があまりに素晴らしいからお客さんは見に来る。実はそういう順番になっていると感じる。同様に、いかにして外からお客さんを連れてくるかよりも、まず秋田県自らをしっかりとしていくことが重要である。

また、本日説明いただいた資料の中で、観光入込客数が減少してきているということだったが、県内外別でこの数字を見たい。私が言いたいのは、県外の人だけに焦点をあてるのではなく、県内の流動を活性化させることがまず重要なのではないかということである。私を感じる限りは、なかなか県内の人には動いていない。確かに県内流動のみでは、宿泊や消費単価は上がらないかもしれないが、まずは県内の人々が県内を見て回るといった環境を整えること、県民のマインドを変えることが重要だと考える。

総消費単価を上げるというお話があったが、私が聞いた話では、いわゆるアニメオタクと呼ばれる方々は、自分の好きな物に対しては、いくらでもお金をつぎ込むという。

同様に、秋田県でも何か特筆できるものを作ることができれば、おのずと人が来て、お金を落としていってくれると思われる。日本国民全員でなく、ある一部の人のに対してでも構わないのでそうした取組ができればと考えている。

● 佐藤部会長

単価の高い高級なものを売り込んでいる成功事例などあるか。由布院は戦略の転換により一時期ブームとなったが。

◎ 渡邊委員

由布院は観光客が400万人くらいまで増えたときに、ターゲットを300万人くらいまで絞り込み、連泊を推進するという取組をした。宿泊単価も上げ、良い客層に対して本物の由布院を見てもらおうという方向性をとった。そこでお客さんの満足度を上げ、口コミによる効果やリピーターの獲得を狙ったのである。旅行を決めるきっかけの6割が口コミというデータもあり、口コミは非常に重要である。地元の人の意見も同様に重要であり、県外の知り合いなどから秋田の良いところを聞かれたときに、しっかりと答えられることが大事。あるところでは、県民を対象とした宿泊補助を実施していたりする。その補助を利用した地元民が県外の人に対して良いところをおすすめするという仕組みである。

◎ 日景委員

以前に観光連盟でそうした宿泊補助を実施していたと記憶している。その利用実績などはあるか。

□ 前田観光文化スポーツ部長

先日、利用実績のデータを見た。明確に分かるのが、行きたくても普段行けないようなところ、また、すぐ近くの遊びに行くようなところ、この二つのパターンに利用者が集中しているということである。

● 佐藤部会長

日景温泉では、お客様に対するサービスの提供に関する工夫をしたといったことはあるか。

◎ 日景委員

日景温泉では、いかに食材・料理のストーリーをお客さんに伝えるかを大事にしている。そうすることで、お客さんは非常に喜ばれる。

これは、料理に限ったことでは無いと思われる。観光するにしても、ストーリー性は

非常に大事である。

● 佐藤部会長

ストーリーや歴史は大事だと思う。鉄道好きの方が秋田の森林鉄道の跡を見にくるといふ話も聞いたことがある。

県では、カテゴリー別の客数、例えば、鉄道を見にきた客の数や釣りに来た客の数などを把握しているか。

◎ 日景委員

どこでデータを取るかという話になるが、おそらく宿泊施設で取るのが一番確実だと思う。ただし、その場合には各宿泊施設のコミュニケーションスキルの違いが問題になる。

◎ 小国委員

浜岡委員がおっしゃったように、秋田の人が地元のことを知らないということなので、もっと地元を知ろう、秋田に宿泊しようという施策が必要ではないか。

● 佐藤部会長

最近は、「食ベログ」など利用者の評価で誘客する仕組みがある。宿泊施設などについても同様の仕組みはある。何かそういった利用者の口コミを利用した誘客方法は無いものか。

□ 前田観光文化スポーツ部長

まさにそうした時代の方向性を模索しているところである。

また、先に県内交流の促進の話があった。これについては、外からお金が入らないので意味がないという意見もあるが、私は反対に必要なものだと考えている。次年度からは隣県も含め、県内の交流人口を増やす施策に予算を傾注していきたいと考えているので、この件については委員の皆様に論議していただきたい。

◎ 渡邊委員

メディアの利用などについてだが、インバウンドに関して言えば、メディアそのものを呼ぶよりも効果的だったのがブロガーの招聘だった。個人のツイッターやブログなどが効果を発揮する。私も随行したことがあるが、その際に印象的だったのが、単なる看板など、そこに行ったという証拠になるようなものと一緒に写真を撮るということだった。

◎ 浜岡委員

県内や隣県との流動を活発にするためには、秋田と横手や秋田と岩手などお互いの行き来を促進するような取組も一つの手かなと思われる。

● 佐藤部会長

ここまででも様々なご意見が出たが、より具体的なアイデアがあったら願います。

◎ 渡邊委員

言いやすさを考えることは重要なことである。例えば、日本一や東北一といった冠をつけるだけで、宣伝はしやすくなる。百選などでも構わない。

◎ 浜岡委員

私も同感である。県でそうした観光に結びつく日本一や東北一のもののリストを作ったらどうか。

□ 観光文化スポーツ部スポーツ振興課長

県では、以前からそういったリストアップをしている。

◎ 日景委員

それに対してストーリーを付加してまとめることはできないか。例えば、それをパンフレットとしてまとめて、観光地に置いたり、宿泊施設の人が話の種にしたりなど、様々な活用はできるのではないか。

● 佐藤部会長

産業遺産は秋田にもある。日本で最初のコンビナートは茨島である。

◎ 嶋田委員

秋田は枝豆の出荷が日本一である。昨年枝豆を香港に売り込みに行ったが、非常に人気でオーダーも何度かいただいた。しかし、取れる期間があまりに短かったので、その後のオーダーには応えられなかった。何か良い方法がないか検討したい。

◎ 小国委員

やはり何かを「とがらせる」ことが大事である。山形では、皆で協力して集中的に一つのを売り込む手法をとっている。秋田はおいしいものがたくさんある。山形と同じように、皆でまとまって売り込むことができれば売上はもっと伸びるはずである。

● 佐藤部会長

最近ではインターネットの普及もあり、通信販売で物を買う人が増えているが、通信販売のみという人は少ない。実際に現地で買った人が、また買ってみようと思って、インターネットから購入するのが主流だと思う。これをヒントに、東京で少しだけ食べさせて、あとは現地でしか食べられないというような仕組みで、秋田に人を呼ぶといった仕組みはできないか。

□ 観光文化スポーツ部うまいもの販売課長

そのような希少感を演出するモデルは、人がくる観光地でなければ成立しないモデルである。

関連する話をすると、去年は、東京で販売せず秋田でしか買えないという日本酒を少量作った。それが評判となり、東京の販売店から入手方法について問い合わせが殺到し、その結果、今年はものすごく売れていると聞く。そういった意味で希少感の演出は重要だと思われる。

◎ 小国委員

B級グルメの祭典「B-1グランプリ」を横手市で開催したときは、ちょうどシルバーウィークであったこともあるが、ものすごい客の数だった。あの種のイベントが毎年、県内で開催できれば良いのだが。

◎ 渡邊委員

セカンドブランドやプレミアムブランドといった戦略がある。少数しか製造できないのであれば、県内でのみ販売して、県外に対してはインターネットから販売し、数が少ないという弱みを、現地でしか食べられないという希少感につなげることができる。反対に、多くの生産量があるのなら、全国に対してはトップブランドを出さずに、セカンドブランドを普及させ、本物は現地でしか食べられないといった演出も可能である。

また、リピーター戦略という言葉を目にするが、例えば体験の場合、一度体験したら必ずもう一度来なければならない仕組みを作ることが大事。具体例として、田植えに来たら、後で刈り取りにこななければならないなどといった仕組みである。

● 佐藤部会長

名刺の裏に観光施設等のクーポンが勝手についているという仕組みはおもしろいと思う。実際に岡山県の人と名刺交換した際には、そのような名刺になっていた。これは良い取組だと思うので、県庁をあげてできないものか。

また、観光地までのアクセスの話だが、今はもうバスでは無いと思う。例えば、レンタカー特区などを行政も巻き込みながら、設定できないものか。難しいかもしれないが、

二次交通の改善にはつながると思われる。

◎ 日景委員

特に県北は、公共機関での移動は不便で、レンタカーで観光地をめぐる人が多い。何かレンタカーが安く利用できるような仕組みをつくれれば、お客さんは来やすいと思う。

□ 前田観光文化スポーツ部長

大館・能代空港ではすでにそうした取組をしている。

● 佐藤部会長

ロコミの活用は必要である。例えば「ロコミ隊」なるものを結成するなどできないか。また、県外に住んでいる秋田県出身者は非常に多いので、そうした人に協力してもらうのも一つの手だと思う。

また、津軽の地吹雪ツアーなど、本来であればマイナスのものを逆手にとらえて観光資源にしてしまうという考え方も重要である。

それから、そこに住んでいる「人」も観光資源になり得る。そういった取組のモデル地域をどこか秋田に設けられないか。

◎ 嶋田委員

そうした場合には、地域がまとまって応募する形式でやったらどうか。

◎ 小国委員

IR専門委員会というのに参加している。参議院選挙が終わると日本でもカジノが合法化される可能性がある。合法化された際には3地域くらいがまず始めて、そのモニタリングをすることになると思うが、これについては、是非秋田に引っ張りたいと思っている。県も本腰を入れてやっていただきたい。賛否両論あるが、カジノは間違いなく人を呼ぶ起爆剤になり得るものである。

◎ 嶋田委員

大きなコンベンションセンターも必要である。大人数の参加がある全国大会については、それを収容する施設が無い場合、誘致することができない場合がある。

◎ 浜岡委員

今日だけでも様々な意見があるが、何を実施するにしても、その結果をどう評価していくかを考えていかなければならない。例えば、どれだけの人・金をかけて、いくら経済効果があったかなど、ある程度科学的に検証できるような形にするべきである。そ

のような形で検証ができれば、観光入込客数も指標として良いのではないかと。

● 佐藤部会長

ちなみにアイリスの効果も含めて、現状の秋田への外国人の入込みの状況はどのようなものか。どこの国からの観光客が多いのか。

□ 観光文化スポーツ部観光振興課長

昨年の外国人宿泊客数は、年間を通して2万3千人くらいである。主に韓国、台湾からのお客さんが多い。ちなみにピークは6万4千人くらいまでの宿泊客数があった。

● 佐藤部会長

ソウル便があるので、当然韓国に力が入るところだと思うが、これから呼びたい国というのはあるか。

□ 前田観光文化スポーツ部長

それに関しては、あえて外国人のために何かをするというわけではなく、今あるものを見てくれる人を呼びたいと思っている。同じ外国人にしても、日本に住んでいる外国人の方もいる。この半年で、そのあたりはもう少し緻密にやっつけていこうと考えている。

◎ 渡邊委員

2009年、2010年あたりから、大学に留学に来ている外国人を対象にモニターツアーを実施した。留学先を決めるにあたっては、実際にそこに留学している先輩を頼ると言われているが、留学生というのは、意外とその留学先のことについてよく知らないというケースがある。それではいけないと思い実施したわけである。

実施してみると、参加者の出身国によって様々な感じ方があった。しかし、やはり彼らの視点を通して主要な観光地は浮かび上がってくる。外国人留学生たちが高い満足度を感じたものについては、国内においても同様に満足度が高いものだと思う。

● 佐藤部会長

国際教養大学のイギリスから日本に来ている方に聞いた話であるが、秋田は長期滞在に適しているとのこと。そうした人は特にコテージなどに滞在することを好むそうだが、こういった長期滞在をする方は日本中においても多数いると聞いている。

◎ 日景委員

日本にいる外国人という視点では、大使館に秋田を売り込むということはどうか。

□ 前田観光文化スポーツ部長

それはちょうどこれから実施するところである。

◎ 渡邊委員

これから成長が期待される市場については、見ておく必要がある。人口ピラミッドの動きや、一人当たりのGDPというものもしっかりとチェックし、今後の動きを読んでいかなければならない。

□ 前田観光文化スポーツ部長

観光分野は、やはり競争なので、皆で一緒に良くなることはできない。一方で、行政は一定の平等性の概念をどこかに置かなくてはならない。本日も皆様から様々なご意見をいただき、そのほとんどが正しいと思う。また、実は私が普段から話していることも多くあった。しかし、それに対して行政が何をするのかといえば、限られた予算の中で、すべきこと、すべきでないことの線引きが非常に難しいところがある。

また、この分野については、二次効果、三次効果を求める分野であり、結果がいつどこに表れるかがわからないところがある。とは言いながらも、この部分は行政がやるべきだという整理をした上でご提言いただければ、我々も動きやすい。

● 佐藤部会長

行政と民間の役割分担の中で、どこまで行政にやってもらうかなど、またゼロ予算でもできることは色々とあるので、そうした部分について二回目以降で議論していきたい。

◎ 日景委員

次回までに本日出た意見を事務局でリスト化し、現段階でできそうなものやもっと議論が必要なものといった形で整理してもらえると次回の議論がしやすくなるので、よろしく願います。

□ 須藤観光文化スポーツ部参事

本日、事情によりご欠席されている委員の方からも事前に意見をもらっているので、代表的なものだけ紹介させていただく。

まず打川委員からだが、県産農産物を活用し、県内で加工等を行った上で付加価値を高め、売り出して行く取組を積極的に支援すべきということ、また、本日小国委員からも出た意見だが、デスティネーションキャンペーンや国民文化祭などの成果を今後にどうつなげていくのか、イベントあるなしに関わらず、足腰の強い観光地づくりが急務であるということ、そして、高速道路の整備が進んでいるが、その背骨をつなぐ横軸の道路整備も必要であるということなどが意見として出された。

次に、水野委員からは、主にスポーツ分野であるが、スポーツ交流を通じて、東北域内の流動を活性化させていきたいといった意見等をいただいている。

● 佐藤部会長

スポーツや文化、食などについては次回以降議論を深めていきたいと考えている。

□ 事務局

今回は7月30日火曜日の午後3時から開催する。場所等についてはおって連絡する。

〈 終 了 〉